

2013年度 卒業研究

「生活学校の展開と役割

—盛岡友の会生活学校と北海道本別生活学校を事例にして—

メンバー：酒井理人 田中真人

指導：咲花昭嗣 酒本絵梨子

この研究は、友の会生活学校に関して、その展開と果たした役割を資料やインタビュー調査から明らかにすることを目的とし、その中でも、盛岡友の会生活学校と北海道本別生活学校（友の会による生活学校ではないが、深い関わりのある学校）がそれぞれの地域で展開された過程と役割について考察した。その結果、これらの生活学校は自由学園と共通する教育理念を持ちつつも、地元を受け入れられて、より地域に根ざした教育が展開されたことが明らかになった。

I、はじめに

友の会を始めとした生活学校は、羽仁もと子・吉一の「生活即教育」「思想しつつ・生活しつつ・祈りつつ」の理念をもって運営されてきた。しかし今日までにおいて資料が整理されていなかった。そこで設立の経緯や各地域に対してどのような役割や教育的意義があったのかなどを明らかにし、いわば自由学園の分校のような学校が全国的に展開されていったのではないかと仮説を立てて研究を進めた。また日本における他の「生活学校」との比較をすることにより、その独自性が明らかにできるのではないかと考えた。

池袋児童の村小学校設立 (1924)	
昭和東北大凶作 (1930~34)	盛岡友の会生活学校設立 (1933)
第二次世界大戦 (1939~45)	盛岡生活学校に改名 (1948)
新生活運動協会発足 (1955)	北海道本別生活学校設立 (1974)

表1 取り上げた生活学校と時代背景

II、日本における生活学校の系譜

1. 大正新教育運動における生活学校

野村芳兵衛（1896-1986）が開いた池袋児童の村小学校（1924）は協働自治を基本とする「生活学校」構想に支えられた大正新教育学校である。

野村の思想は、「教育とは社会が行ふ生活の協働自治的組織化である」⁽¹⁾という考えを基にして、「生活学校とは、学校を子供達の生活の場所として、協働体社会に組織し、子供達の身体的必然（愛）と環境的必然（公利）とを協働自治的に統制せんとするもの」⁽²⁾、「教師対生徒と云ふ觀念に囚はるる処なく、教科目や教授時間、はては教授法など云ふものに縛らるることなく、児童らしき生活を生活せしむる場所としての新しい学校」⁽³⁾という思いがあった。

また世界の新教育運動の流れにおいては、教育施設を（狭義の）学習の場としてではなく、生徒の日常全体に関わる生活の場として再構築しようというものであり、「旧来の『学習学校』を生活の視座から改造することで、『生活（共同体）学校』の創出が企図されたのである」と熊井の研究において指摘されている⁽⁴⁾。この生活学校の系譜の起点はドイツ田園教育舎を創設したヘルマン・リーツ（1868-1919）によるもので、学校を一種の家とする思想に出発し、学校内部に家族または仲間としての生活共同体を構成させ、それを通して教授・訓練を行うことで、学校を訓育学校（Erziehungsschule）へと改革することを試みたものだった。

以上の新教育の流れによる生活学校では、学校に具体的な行為の場としての「生活」を呼び込み、より直接的に子どもの行為や意思へと働きかける領域を設定することで実践化された。このことは、

学校教育におけるインフォーマルな教育的意義の発見であるとともに、学校が市民的・社会的・道徳的価値を育てる社会的組織であることが承認されたことを意味する。野村が、自分達が自分達を教育することが学習であるとし、学習とは生活の組織化であると述べるように、生活を教育の中心に置くことが社会性を身につけることに最もふさわしいと言えるだろう。

2. 新生活運動協会の生活学校

一方、第二次大戦後の混乱から経済成長へとたどる中で、新生活運動協会が展開した生活学校は、女性の発言や活躍をもっと社会に反映させ、新社会をつくることを期待した活動といえよう。

この生活学校は、1964年度から推進された「くらしの工夫運動」によって生まれた。その運動推進要領によれば、生活水準の向上、生活様式の近代化にもかかわらず、日常生活にはなお不合理、不均衡が多く、前近代的な人間関係や生活意識が内蔵されているとして、日常生活の具体的諸問題に即した運動を推進し、『生活者の主体性を回復し、生活意識の向上をはかり、ひいては健全な消費者運動にまで発展しようとする』ことをねらいとしている。従って、『1. 日常消費生活の合理化・不均衡の是正』を目標とし、主要課題は『主体性をもって生活設計を行う』ことであり、『2. 主として、家庭婦人層を対象としてこの運動を推進し、婦人層の小グループ活動を漸次組織化するとともに、その交流拡大をはかり、家庭消費者としての立場から、社会的な発言ができるような体勢を次第に作り上げる』としている。⁽⁶⁾と、述べられていた。この運動が起こるまでは主婦は家庭の中の発言が主であり、社会向けにはあまり発言がなかったであろう。そしてこの運動を通して女性の社会進出の強化に取り組んだのである。生活学校の運営方針は、①主婦メンバーが主催し、運営し、評価していく自主的な学校であること、②単なる学習ではなく、課題を解決するための場であり、手段であること、③主婦メンバーを中心に、専門メンバーの参加を求めて討議するもので、ここには教えるものと教えられるものとの関係はない。つまり講師や助言者という名称はなく、問題解決のためのメンバーだけが集まっていること、

④討議された結果を具体化するための処理活動が重要であることとされた。実際の運営には地方自治体や省庁などの行政機関代表者、企業からの出席もあり、消費生活相談や消費者行政と繋がるものであったことが言えるだろう。

Ⅲ、友の会生活学校

1. 友の会生活学校の変遷

羽仁もと子・吉一が創設した『婦人之友』の雑誌の理念に強く共感した愛読者達の団体である友の会は、いくつかの地方組織がそれまで行ってきた講習会を生活学校と称して事業を展開した。

友の会による生活学校は若い女性を対象とする「青年部生活学校」と、小学生を対象とした「子供生活学校」の2種類の形態があった。前者は主に週に1日、後者は夏期の2週間程度で開催されていた。本稿の主な研究対象である盛岡友の会生活学校は、青年部生活学校にあたる(青年部とは、女学校を卒業したばかりの年代の友の会会員による組織を指す)。

以下の表は、友の会青年部生活学校について、婦人之友の「友の会ニュース」、友の会中央部による「友の会レポート」の資料を用いて調査しまとめたものである。

※今回の研究では青年部生活学校が主要なため、子供生活学校は年表には記載していない。

(1903年	家庭之友創刊)
(1921年	自由学園創立)
(1930年	全国友の会成立)
	⋮
1932年	東京(講習会から生活学校へ発展)
1933年	長野、京都、静岡、金澤、京城、岡山、飯田、岐阜、盛岡、函館、札幌、名古屋、高知、長岡
1934年	大阪、大連、下関、釜山
1935年	神戸
1936年	生活学校から講習会へ
	⋮
(1938年	自由学園北京生活学校開校)
(1948年	自由学園目白生活学校開校)

表2 友の会生活学校の略年譜

青年部生活学校は、1932年9月20日に東京友の会から始まっている。そしてその1年後の1933年から盛岡友の会を含んだ各地に生活学校が開校されてきた。当時の時代背景もあり、海外の友の会で京城(現ソウル)、大連、釜山でも生活学校が

開かれていた。

しかし、開校に際した思いが書かれた文面はあっても、「生活学校」と名称づけた記事が見つからない。唯一盛岡友の会生活学校を開校した吉田幾世の選集の中に「友の会のお母さん達と一緒に生活学校を始めることになった時には、いの一に両羽仁先生へ御報告に上京した。(一中略一)所がお二人はたいへん喜んで下さり、ミスタ羽仁に、「生活学校か、いい名前だ。今度北京に作る学校の名前を『北京生活学校』としようと考えていたが、吉田さんに先を越されてしまった」といわれて、私は大変びっくりした。」⁽⁶⁾と述べられている記事があるが、時系列にそって確認すると東京友の会が先に生活学校を開校しているため、吉田幾世が先立って「生活学校」と名づけたわけではないようだ。

これらの生活学校のカリキュラムでは、友の会ごとで多少異なるものの、礼拝、デンマーク体操、食事作り、仕事、掃除はほとんどの生活学校で取り組まれていた。これらは自由学園でも行われているカリキュラムであることがわかる。また、女子部の卒業生が手伝いに関わっていたことも、大きな特徴でもある。

友の会の活動は基本的に社会改良運動であると位置づけられるが、そのことと生活学校という教育事業とは、どのような関係と考えられるのだろうか。それに関して、今回資料を読み解く中で、羽仁吉一が友の会と生活学校について自身の考えを、1935年に行われた第5回友の会大会で公表していることがわかった。それによれば、「友の会を現代に起こった一つの教育運動と私は見る。そして生活学校はその教育機関である。その外部においては何ら学校の形式をもたずいわゆる認可もとらぬきわめてささやかなもので今はあるが、その本質が決してよい加減であってはならぬ。現代教育の分野においてその教育的使命の故によき貢献がなせるよう充分な良心的生活的用意をもってやるものでありたい」⁽⁷⁾。

この内容は、吉一の考えが、友の会生活学校は短期的な講習会の延長としてではなく「学校」として展開されてきたことにたいする評価であるといえるだろう。

しかし東京友の会の生活学校から始まってわ

ずか4年後、各地の生活学校が一斉に終わることとなる。それは学校として運営されてきていたためにその負担が大きいことと、友の会主催による、昭和東北大凶作(1930-1934)に対して働きかける東北セツルメント(1934)が盛んな時期で、その支援のため生活学校の運営が厳しくなったことが原因であった。そのように生活学校が再検討される中、友の新聞第八号の記事に、羽仁もと子は「生活学校をやめて、前の講習会に戻るのでは決してなく、ここまでの生活学校の経験を土台に」⁽⁸⁾と提案されていたことが記載されており、この羽仁もと子の助言から生活学校が全国的に講習会へと再び移り変わっていった。

以上で述べた友の会における生活学校は全体を通して最長でも4年間という短い期間であったが、たとえ週に一日であってもそれぞれが学校として生活即教育の理念をもって展開されてきたことがわかった。

2. 盛岡友の会生活学校

盛岡友の会生活学校は吉田幾世を始めとする盛岡友の会会員達によって、1933年7月1日に、園芸組合の会議室を用いて設立された。盛岡友の会の会員達の、『婦人之友』を教科書にして勉強をしているうちに、よい家庭、よい社会をつくるための勉強は、自分たちのように家庭をもってからではもう遅い・・・(中略)・・・だから娘時代にしっかり身につけておく必要があるというので、若い人たちに、勉強しましょうと呼びかけることになったのです。」⁽⁹⁾という強い思いが背景にある。

開催頻度は週に4日、8時50分から16時までで行われた。授業内容は洋裁、裁縫が週に16時間、科学が週に2回、工芸、音楽、体操、洗濯が週に1時間、この他にも時事問題、経済、美術、衛生、医学などの課外講座を随時週に1時間である。このような生活学校の大きな特徴として、吉田幾世の存在が生活学校を運営していく中で大きかったであろう。

吉田幾世は岩手県盛岡市出身の自由学園女子部10回生であり、自由学園への入学のきっかけは婦人之友を愛読していた母親である吉田イマ(後年盛岡友の会生活学校の先生)によるものである。そして1932年に東京で開かれた全国友の会に親

子で出席したことをきっかけに、盛岡に帰ってから購読者を募り、盛岡友の会が結成された。

また吉田幾世は学生時代に、卒業後は自由学園で働きたい旨を羽仁もと子に相談したが断られ、その中で「郷に帰ってあなたの根城を守りなさい。」⁽¹⁰⁾と励ましがあつたことと、『『自分の受けたよいものは一人じめせず他の人にかけてあげなくてはならない』という、羽仁先生道はこれだという思いから、終に日報社をやめて生活学校に専念することを決意したのであつた。』⁽¹¹⁾

地域への展開と役割について、この年報では他の友の会と違って生活学校が中断されることなく継続された要因となった田山村セツルメントについて記載する。

盛岡友の会生活学校では東北セツルメントの一環として、同じ東北地方の近隣の農村の実態を知らないことに疑問を抱いていたことを動機に、当時の生活学校から田山村（現在八幡平市北西部あたり）の農村住民に対して、学校を立ち上げてセツルメントを実施した。生活学校の生徒も有志で参加したところが大きな特徴である。

そして田山村を調査し、その内容が日本の農業政策の権威者である農村会会長から評価され、受け取った褒賞金で本を製作した。またこの活動では、岩手県地域の農業の問題点も指摘しているが、それは後に公立高校に農業科が設立され、地域の農業の向上が図られる動きに繋がった。

この田山村セツルメントは、「私たちはセツルメントに、物やお金やいわゆる人が日がたてば消えるものではなく、人間が人間らしく生きるための第一歩を、難しい言葉でいえば人間性の回復をうながしたということです。」⁽¹²⁾「もともとセツルメントは五ヶ年計画ということでいつまでもダラダラ続けるというやり方ではありませんでした。それでは五年後はどうするのかといえば羽仁先生のお考えとして、あとは農民自体で独立して歩いて行くということです。」⁽¹³⁾との二つの考えから、活動が終了した。

3. 北海道本別生活学校

北海道本別生活学校は林育雄（自由学園男子部14回生）と林敏子（盛岡生活学校8回生）により、1974年6月20日に北海道本別町の本別駅前

の二階で始められた。この生活学校は、友の会が運営母体ではないが、友の会生活学校と深いつながりがある。林敏子は盛岡生活学校卒業後、盛岡生活学校で学んだことを生かした学校を郷里に創りたいと願い、自由学園最高学部を卒業して盛岡生活学校に教師として勤めていた林育雄は、林敏子の夢に賛同し二人で生活学校を始める。カリキュラムとして「家庭料理クラス」と「生活科」を開設。家庭料理クラスは料理実習を中心に、生活科は午前

に学科の勉強、午後は勤労の時間とし展開した。1988年まで本別の駅前教室で「家庭料理クラス」が続けられ、1988年からは現在の西活込校舎で生活科の運営が始まった。それから本別駅前教室と並行して3年間運営された。並行しての運営を終え、それからは西活込校舎で「生活科」のみが続けられた。

教育指針として「しなさい、やりなさい、とは言いません、ここは自分で自分を鍛え上げていく学校です」と掲げている。また、「生活即教育」をモットーに「人間らしい真の生活を学ぶ学校」、「生き生きとした生活勉強のできる学校」として展開されている。

インタビューの中で、林敏子は食の勉強の時に生徒に「よく食べて、元気になって、よい働きをする」の3点を毎日伝えていた、という。よい生活とは何か、みんなで心と身体をつかって考えることを教育する上で大切にしていたのである。

地域への展開と役割については特徴的なのは、本別に住む人々に様々な料理を提供することを目的にじゃがいもを中心に生活学校附属レストランを開いたことである。レストランでは合わせて牛乳や豆を使用した料理も提供していた。大変好評で、行列ができるほどの人気となった。

家庭料理クラスは通いでの通学形態であったために本別近郊に住む生徒がほとんどであった。昼クラスと夜クラスで展開された。仕事等をしてきた人は夜クラスに通い、主婦の人等は昼クラスに通っていた。実習中の手の空いた時間には「婦人之友」や「聖書」などを読み学ぶ時間を設けていた。

生活科は家庭寮と呼ぶ寮を用意し受け入れたため、近郊の生徒だけでなく遠方から入学する生

徒がいた。起床して就寝するまで全てが勉強と考え展開され、林育雄、敏子の生活も生徒と共に行われたものであり、2人が生徒と共に24時間生活を共にし、生徒を教育した。午前中には学科の勉強と調理実習、午後は労作とよぶ、外で働く時間であった。学科の勉強では聖書、食、科学、数学、暮らし方、持ち数調べ、英語、パソコン、習字などが行われた。また、生徒が希望した科目でもできる限り教えられるよう環境や教師陣を整えた。

林育雄、敏子が本別町で展開してきた生活学校、レストランの事業によって本別の人々は大きな影響を受けた。受講生自身が生活学校の授業を通して学んだ料理を家庭でふるまったところ、大変好評だったそうである。林育雄の見解では、自分たちが事業を展開するまで、ほとんどの本別の人々にとって豆や芋は昔から栽培している商品であり主食で、その調理方法は「煮る」等の簡単なものであったようだ。そのため、違った調理法が喜ばれたのだろうという。このことは、生活学校が地域の食文化の発展に寄与したことを物語っており、学校と地域社会の関係を考える上で、非常に重要なことだろう。

IV、生活学校の展開と役割

当初、自由学園のような学校が全国に生活学校という形で展開されたという仮説をたて、調査研究を進めてきたが、一概にそうではないことが分かった。友の会による生活学校は自由学園とは違う形で地域に対してより深く根ざして進められていた。具体的には、盛岡の友の会生活学校では東北セツルメントでの活動、北海道本別生活学校では生活学校付属レストランなどの活動である。地域に直接働きかける活動が、それぞれの地域のために存続されることに重きをおいた学校として運営されていたことに自由学園との違いが見られた。また、開催頻度（週に1回や短期間等）や、カリキュラムが自由学園と違ったことも友の会の生活学校の特徴的な点である。

また、友の会は生活学校を講習会から発展し、学校として自由学園と同じ「生活即教育」、「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」を理念として掲げ展開されていたが、生活学校の生徒の中には、東京の自由学園に通いたくても遠方であったので

物理的・経済的理由から、また定員数の関係で入学することができなかった人も多数いたことがわかった。大阪友の会生活学校について書かれた記事の中に「新しい人達の自己紹介があった。たいいてい今年か去年に女学校を出た人で、『自由学園に入りたかったけれど、大阪に生活学校が出来るというのでこゝにきた』という人もあった。」⁽¹⁴⁾とあり、その意味では、自由学園の分校が各地にあったという側面も指摘できるだろう。

今回、盛岡友の会生活学校と北海道本別生活学校を事例として取り上げて研究を進めてきたが、それぞれに共通していることは、地域に根ざした教育活動を行っていたこと、羽仁両先生の励ましがあったこと、地域からの評価が高かったことである。盛岡友の会生活学校創作者の吉田幾世は羽仁もと子の「郷に帰ってあなたの根城を守りなさい」という言葉に、林夫妻は吉一から励ましを受けそれぞれ生活学校を展開していった。

吉田幾世や林育雄は、自由学園で学んだことを活かし、自分の考えや思いを込めて各地域で生活学校を展開した。また、他の卒業生も各友の会の生活学校を手伝っていた。

各友の会の生活学校にとって、自由学園の生徒及び卒業生を指導者として受け入れたことは、大きな意味を持った。若く非常に活力があり、かつ、羽仁もと子、吉一の身近に学び、「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」、「生活即教育」からなる自由学園の教育を受けてきた人の指導を受けたことで生活学校でも、その思想が根付いたのだ。

また、自由学園の生徒及び卒業生にとっては、生活学校で活躍したことにより、自由学園で学んだことの実践できる立場として、非常に生活学校の役に立ったことで、自分を成長させられた場所であったといえる。

生活学校の生徒・教員と自由学園の生徒及び卒業生に生活をよくすることは社会をよくする、という共通の価値観があったことで、共に活動を行うことができた。

V. おわりに

羽仁もと子・吉一の理念を受け継いだ生活学校と、大正新教育の生活学校、新生活運動協会の生活学校と対比させてみると、どれにも生活水準の

向上を目指した働きが見られた。

新教育の生活学校の「生活」では野村芳兵衛の思想による「児童らしき生活を生活せしむる場所としての新しい学校」⁽¹⁵⁾との方針のもと、生活によって子どもの人格形成の発達があること、児童劇に代表される総合的芸術教育と子どもの生活が教育理念の根本に据えられていることが特徴的である。

教育実践による子どもの人間形成に重点を置いている新教育に対して、友の会生活学校は羽仁もと子・吉一の思想である、社会をよくするためという点に重きを置き、地域という社会に対して働きかけ、生徒の教育と地域社会の活性化を合わせ持つ「生活」であることが大きな違いであろう。

新生活運動協会の生活学校は、家庭の主婦を対象とし、家庭消費者の立場として日常消費生活の合理化・不均衡の是正を目標として主体性をもって生活設計するという点は、日常生活の中で良いと思ったことを実行する生活合理化を目指した友の会の「生活」と共通する。しかし行政、業者と協議し、消費者として生活を合理化させるための手段として、生活(家事労働)の外部化を含めて、あくまでも消費者としての立場を明確にした新生活運動協会の生活学校に対して、友の会生活学校では自分たちの生活をよりよいものにするために効率の良い家事などを考案し実行し、単なる消費者ではなくキリスト教的基盤に基づく生活を目指している点では、両者には違いが見られた。

この研究を通して多くのインタビュー調査を行ったが、林敏子氏は盛岡生活学校でキリスト教の教えを理解しようとして、その思想が生活学校のあらゆる勉強の元であることを学び、須田節子氏は家庭科が全ての生活の基礎であることを学ばれていた。盛岡生活学校と北海道本別生活学校の関係者インタビューからは、衣食住の勉強や技術習得するためだけではない、それらを通じた生徒それぞれの思想や社会における実践が語られた。

生活学校の教育において「生活」は、生徒それぞれに人生の生き方、考え方に影響を与え、さらには個人の生活を良くすることを基礎として社会を良くするために働きかけることを実践するための学びを支えるものであるとまとめられる。

生活学校と共通する思想による自由学園の教

育を受けてきた私たちは、一般的な学校教育においても、「生活」は生活学校と同じ意味をもつものであると、本研究を通じて強く感じた。

註

- (1) 山住勝広・富澤美千子 「野村芳兵衛における生活学校の発見と創造-児童劇の協働自治的実践を中心にして-」 『学校教育学論集』第1号 2010 関西大学 p. 29
- (2) 野村芳兵衛 「教育と児童劇」 『月刊 児童劇』第5号 1936 p. 1
- (3) 教育の世紀社 『私立池袋児童の村小学校要覧』 1924 教育の世紀社 p. 7
- (4) 熊井将太 「改革教育学における生活学校の系譜に関する一考察」 『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第56巻 2010 p. 238
- (5) 井上 恵子 「昭和40年代の生活学校が女性の学習に果たした意義」 『教育学雑誌』 2004 pp. 49-50
- (6) 吉田幾世 『忘れ得ぬ人々-学園の礎を築いてくださった方々-』 1994 三陽印刷 p. 25
- (7) 友の会中央部 「友の会レポート 第四十四号」 1935年 p. 3
- (8) 友の会中央部 「友の新聞 第八号」 1936 p. 4
- (9) 吉田幾世 『生徒に語った=私たちの学校の歴史』 1972 河北印刷 p. 10
- (10) 吉田幾世 『忘れ得ぬ人々-学園の礎を築いてくださった方々-』 1994 三陽印刷 p. 24
- (11) 吉田幾世 『同上』 1994 p. 98
- (12) 吉田幾世 『生徒に語った=私たちの学校の歴史』 1972 河北印刷 p. 72
- (13) 吉田幾世 『同上』 1972 p. 66
- (14) 友の会中央部 「友の会レポート 第三十一号」 1934 p. 8
- (15) 教育の世紀社 『私立池袋児童の村小学校要覧』 1924 教育の世紀社 p. 7

註以外の主要参考文献

- 羽仁もと子 『羽仁もと子著作集 第十八巻 教育三十年』 1950 婦人之友社
- 羽仁もと子 『羽仁もと子著作集 第十四巻 半生を語る』 1928 婦人之友社
- 渡瀬 典子 「雑誌『婦人之友』『友の会』活動における20世紀後半の農村生活改善 -盛岡生活学校と「東北部友の会」-」 2009 『岩手大学生涯学習論集』 5